

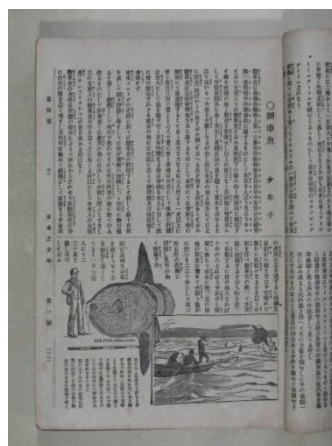
明治・大正時代の少年少女雑誌

雑誌は近代社会の代表的なマスメディアのひとつです。このうち、少年雑誌は明治21年(1888年)の『少年園』の創刊を皮切りに明治20年代に各出版社から相次いで発刊され、各種の読み物を通じ、教養・娯楽を子供たちに提供しました。また、明治時代後期、女子の進学率が上がると、高等女学校の生徒を主な読者に想定した少女雑誌もあいついで創刊されました。

今回の展示では、明治・大正時代の当館所蔵の少年少女雑誌を紹介し、当時の子供たちがどのような雑誌文化に触れていたかを見てみます。

1 草創期の少年雑誌 —『日本之少年』(博文館)—

明治22年(1889年)に博文館から創刊された『日本之少年』は、『少年園』(少年園社)、『小国民』(学齢館)、『少年文武』(張弛館)などとともに、少年雑誌草創期に当たる明治20年代を代表する雑誌の一つです。高等小学校から尋常中学校の生徒を読者として想定し、月2回発行、定価は8銭でした。雑誌の構成は第4巻第6号を例にとると、「日本之少年」、「批評」、「漫録」、「博物談」、「理化学談」、「地理談」、「譚園」、「叢談」、「芳苑蒐萃(投稿作文欄)」となっています。その他、「歴史談」、「立志談」、「懸賞文」などもあり幅広いジャンルを扱っていました。明治27年まで発刊された後、同社の他の雑誌とともに『少年世界』に吸収・統合されました。史料1は明治25年のもので、左側には「マンボウ」の生態について解説が見えます。



史料1 『日本之少年』 第四巻(木津屋家文書 288)

2 少女雑誌の創刊

明治時代後期、女子の進学率の高まりとともに、『少女界』(金港堂書籍)、『少女世界』(博文館)、『少女の友』(実業之日本社)、『少女画報』(東京社)、『少女倶楽部』(講談社)などの少女雑誌があいついで創刊されました。流行作家による文章、絵画、ファッションなどの新しい情報を届けたこれらの雑誌は少女たちに大きな影響を与えました。投書欄を通じた読者会も全国各地でさかんに行われました。

史料2はキンツノ社の『少女界』大正12年3月号(1923年)です。鮮やかな表紙絵が印象的です。吉屋信子や山田耕筰などが詩や文章を寄せています。左側は次号の予告です。



史料2 『少女界』(キンツノ社)大正12年3月号
(堀江静子家文書581)

3 口絵のコレクションの楽しみ

当時、雑誌の口絵は良質な紙に美しく印刷され、加えて竹久夢二などの流行画家が描いていたため、口絵のコレクションが少女たちの間で流行っていました。史料3は、明治時代の終わり頃の「少女の友」の口絵部分を切り取り、綴じたものです。竹久夢二、渡辺与平、川端龍子らの作品が収められ、手製の表紙が付けられています。

前述の史料2『少女界』も口絵が切り取られています。



史料3「雑誌挿絵切抜集」（齊藤家文書73）

4 地方への影響

中央でのこうした雑誌創刊の動きは、地方の知識習得熱を刺激しました。史料4は明治45年(1912年)2月発行の小野共立夜学会の会誌『自学之友』です。

「小野共立夜学会」は明治時代末に萩市田万川で開催された夜学会です。これは満16歳以下の高等小学校の生徒ないし卒業生が先生役となり、向学心のある地元の尋常小学校の児童を教えながら自らも研鑽するという独特なものでした。夜学会は自主運営され、「会則」の中には「うそをいふな」「友を呼ぶ時はさんを付けよ」など集団生活の心得も記されています。

会誌『自学之友』は、中央の雑誌に影響を受けて自分たちの手で作ったものです。巻頭言に「諸君、小野共立夜学会の自学の友は出でり。祝ひ給へ喜びたまへ。同時に自学の友の隆盛に赴かむ事を祈り給へ」と発刊の喜びが記されています。手書きの誌面からは知識習得への意欲と熱意が伝わってきます。中には『少女の友』掲載の作品との重複もみられます。



史料4『自学之友』No. 1・2(小野家文書409-6・7)

5 著名な作家の活躍の場として

少年少女雑誌には多くの著名な作家が文章や絵画を寄せました。史料5は、渡辺与平の画集『子ども』の中の作品です。この画集は、子ども向け月刊誌『兄弟』と『姉妹』に彼が描いた挿絵を集めたものです。渡辺与平は雑誌の挿絵を得意とする人気作家で、明治22年(1889年)、長崎県に生まれ、大正ロマンを代表する竹久夢二のライバルとも目されていましたが、明治45年(1912年)に22歳の若さで病気で亡くなりました。

史料5 『子ども』
齊藤家文書(徳地町)74

